

『新訳源氏物語』 初版の序

上田敏

青空文庫

源氏物語の現代口語訳が、与謝野夫人の筆に成つて出版される
と聞いた時、予はまずこの業が、いかにもこれにふさわしい人を
得たことを祝した。適當の時期に、適當の人が、この興味あつて
しかも容易たやすからぬ事業を大成したのは、文壇の一快事だと思ふ。
それにつけても、むらむらと起るのは好奇心である。あのたおや
かな古文の妙、たとえば真名盤まなばんの香こうを炷たいたようなのが、現代の
きびきびした物言ものいに移されたとき、どんな珍しい匂におが生じるだ
ろう。玫瑰まいかいの芳烈かおりなる薰かおりか、ヘリオトロウプの艶えんに仇あめいた移うつ
つりが香かかと想像してみると、昔読んだままのあの物語の記憶から、
しよしよ処々しよしよの忘れ難い匂におが、念頭に浮ぶ。

「野分だちて、にはかにはだ寒き夕暮の程は、常よりも、おぼし
出づること多くて」という桐壺の帝の愁うれいより始め、「つれづれと
降り暮して、肅しめやかなる宵の雨に」大殿油おとなぶら近く、面白い会話
「臨時の祭の調楽に、夜更けて、いみじう霰あられふる夜」の風流、
「入りかたの日影さやかにさしたるに、楽がくの声まさり、物の面白
き」舞踏の庭、「秋の夜のあはれには、多くたち優る」有明月夜、
「三昧堂近くて、鐘の声、松の風に響き」わたる磯山いそやま陰の景色
が思い出され、「隠ねぞめれなき御匂ひぞ風に従ひて、主知ぬしらぬかと驚
く寢覚ねぞめの家々ぞありける」と記された薫かおる大将の美び、「扇ならで、
これにても月は招きつべかりけり」と戯れる大君の才までが、覚お
東ぼつかないうろおぼえの上に、うっすりと現われて、一種の懐しさ

を感じる。殊に今もしみじみと哀あわれを覚えるは、夕顔の巻、「八月十五夜、くまなき月影、隙ひま多かる板屋、残りなく洩り来て」のあたり、「暁近くなりにはけるなるべし、隣の家々、あやしき賤しづの男をの声々めざましく、あはれ、いと寒しや、ことしこそ、なりはひに頼む所少く、田舎のかよひも思ひがけねば、いと心細ほそけれ、北き殿たどのこそ聞き給へや」とあるには、半はじとみ蔀みきちょう几帳の屋内より出でて、忽ち築地ついで、透すい垣がいの外を瞥べっけん見する心地する。華かな王朝という織物の裏が、ちらりと見えて面白い。また「鳥の声などは聞えで、御嶽精進みたけさうじにやあらん、ただ翁びたる声にて、額ぬかづくぞ聞ゆる」は更に深く民衆の精神を窺うかがわしめる。「南無なも、当来たうらいの導師」
 と祈るを耳にして、「かれ聞き給へ、此世とのみは思はざりけり」

と語る恋と法ほうとの界さかい目は、実に主人公の風流に一段の沈痛うすあかなる趣うすあかを加え、「夕暮の静かなる空のけしき、いとあはれ」な薄うすあか明りの光線に包まれながら、「竹の中に家鳩といふ鳥の、ふつかに鳴くを聞き給ひて、かのありし院に、此この鳥の鳴きしを」思うその心、今の詩人の好んで歌う「やるせなさ」が、銀の器うつわに吹きかける吐息の、曇つてかつ消えるように掠めて行く。つまりこういう作中の名句には、王朝の世の節奏リトムがおのずから現われていて、殊に作者の心から発する一種の軋しなやかな身振ジェストが、読者の胸を撫なでさするために、名状すべからざる快感が生じるのである。

源氏物語の文章は、当時の宮廷語、殊に貴婦人語にすこぶる近いものだろう。故事こじ出典その他修辭上の裝飾には随分、仏書漢籍

の影響も見えるが、文脈に至っては、純然たる日本の女言葉である。たとえば冒頭の「いづれの御おほんとき時ときにか、女にようご御更衣かういあまたさぶらひ給ひけるなかに」云々の語法は、今もなお上品な物もの言いいの婦人に用いられている。雨夜あまよの品しな定さだめに現われた女らしい論理が、いかにもそれに相応した言葉で、畦うね織おりのように示された所を見れば、これは殆ど言文一致の文章かと察しられる。源氏物語の文体は決して浮華虚飾のものでない。軽率に一見すると、修飾の多過ぎる文章かと誤解するが、それは当時の制度習慣、また宮廷生活の要求する言葉遣づかいのあることを斟しん酌しゃくしないからである。官位に付随する尊敬、煩瑣はんさなる階級さきとうの差等、おん「御」とか、「せさせ給ふ」とかいう尊称語を除いてみれば、後世の型とらに囚わ

れた文章よりも、この方が、よほど、今日の口語こうごに近い語脈を伝えていて、抑揚頓挫とんげなどという規則には拘泥こうでいしない、自然のままの面白味が多いようだ。

しかも時代の変遷はおのずから節奏リズムの変化を促し、旋律メロデーは同じでも、拍子テムポが速くなる。それ故に古の文章に對むかう時は、同じ高低、同じ連続の調子が現われていても、何となく間が延びているため、とかく注意の集中が困難であり、多少は努力なくては、十分に古文の妙を味あじわえない。

古文の絶妙なる一部分を詞華集アントロジーに収めて、研究翫味する時は、原文のほうが好かろう。しかし全体としてその豊満なる美を享樂せんとするには、一般の場合において、どうしても現代化を必要

とする。与謝野夫人の新訳はここにその存在の理由を有していると思う。

従つてこの新訳は、漫みだりに古語を近代化して、一般の読者に近づきやすくする通俗の書といわんよりも、むしろ現代の詩人が、古ちようの調を今の節奏リトムに移し合せて、歌い出た新曲である。これはいわゆる童蒙のためにもなろうが、原文の妙を解し得る人々のためにも、一種の新刺戟となつて、すこぶる興味あり、かつ裨益ひえきする所多い作品である。音楽の喩たとえを設けていわば、あたかも現代の完備した大風琴を以つて、古代聖樂を奏するにも比すべく、また言葉を易えていわば、昔名高かつた麗人の倂おもかげを、その美しい娘の顔に発見するような懐しさもある。美しい母の、さらに美しい娘○ヨ

atre pulchra filia pulchrior (Hor, Carm. i 16) とまではいわぬ。もとより古文の現代化には免れ難い多少の犠牲は忍ばねばならぬ。しかしただ古い物ばかりが尊いとする人々の言を容れて、ひたすら品をよくとのみ勉め、ついにこの物語に流れている情熱を棄てたなら、かえって原文の特色を失うにも至ろう。「吉祥天女を思ひがけんとすれば、怯おぢけ氣づきて、くすしからんこそ佗たしかりぬべけれ。」予はたおやかな原文の調ちようが、いたずらに柔軟微温の文体に移されず、かえってきびきびしたしゆうけい勁けいの口語脈に変じたことを喜ぶ。この新訳は成功である。

明治四十五年一月

上田敏

青空文庫情報

底本：「源氏物語上巻 日本文学全集」 河出書房新社

1965（昭和40）年6月3日初版発行

1971（昭和46）年7月15日24版発行

入力：めいこ

校正：もりみつじゅんじ

ファイル作成：

2005年2月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

『新訳源氏物語』初版の序

上田敏

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>